

エレクトティブクラークシップの感想
国立台湾大学病院感染症内科

・台湾を選択した理由

3月2日から3月27日までの4週間、国立台湾大学病院感染症内科で病院実習に参加しました。台湾大学は戦前からの流れをくむ、台湾トップの国立大学です。台湾大学医学部は東大医学部と提携がありますので、その枠組みを利用しました。台湾大学を応募した理由は、学生の中にぜひ海外実習に参加してみたいという強い動機があったのと、医療が常に欧米を意識したものである一方で、他国（とくにアジア地域）の医療事情を観察してみたいという気持ちがあったからです。駒場で第3外国語として中国語を履修したことも影響しました。

・事前手続き

手続きは台湾大学へいくつかの書類をメール提出するのみで、欧米への留学と比べて容易に済ませることができました。**Application form**には履修する診療科と週数に一定の制限（内科6週間以上など）がありますが、前年度の体験記にもある通り、柔軟に組んでいただくことができました。中華圏は2月中旬が旧正月に当たりますので、日程を組む際は注意しましょう。あえて旧正月を挟むのも面白いかもしれません。宿泊先は病院敷地内にある台大景福館を利用しました。改装直後であり、雰囲気はそこそこ綺麗なビジネスホテルといった感じでした。宿泊料は高額ですが、台北駅徒歩3分、病院敷地内、他国の留学生との交流ができるなど利点は多いです。宿泊先も簡単なメールのやり取りで完了します。また、台湾へはブレザーやジャケットタイプの白衣を持って行きましょう。ロングコートは権威の象徴とされるそうで、学生が着るべきではありません。

・台湾到着後

台湾への渡航は、余裕をみて土曜日に行いました。90日以内の短期滞在ですので、ビザなしでの渡航となりました。宿泊先に寮母さんしかいない場合、英語は通じません。受付にある呼び出し鈴をよくよく探して、チェックインは現地語でします。初日の集合場所へは必ず下見に行きましょう。病院内は非常に

複雑です。できれば他の留学生に道案内をお願いしましょう。大学病院（台大醫院）は戦後、中華民國の国立大学病院として発展してきましたが、一方で台北帝国大学の流れも汲み、戦前に作られた建物が現在も病棟として使用されています。台大醫院は、歴史的建造物としても大変意義があります。



（寮から見た旧病棟（手前）と新病棟（奥））

・実習について

病院実習は、感染症内科病棟で入院患者さんを診療しつつ、外来見学を見学し、医学生・研修医と一緒に講義に出席するかたちで行いました。

病棟では毎日病態評価とディスカッションを行い、新たな入院患者さんに対しては、網羅的評価と治療方針の検討まで参加しました。病棟患者さんを診た印象は、診療体制や患者さんのおおまかな内訳については日本と大差はありません。台湾と聞くと南国をイメージするかもしれませんが、台北に関しては都市化が進み、日本の都市と衛生環境は変わらないとのことでした。寄生虫や虫が媒介する人獣共通感染症のたぐいは、あまり診ず、（台湾以南の）輸入感染症を疑うとのことでした。また、発熱と広範囲に皮疹を生じ、デング熱との鑑別を要した患者さんを経験しましたが、それもやはり台北ではなく台湾南部などの旅行歴と季節（3月は流行らない）を重視します。一方で、日本と異なる点も数多く見られました。数日回診をして気づいたのですが、患者さんにはたいい親戚やボランティアがほぼ24時間つきっきりで世話をしています。回診中

に毎回、患者さんのご家族が説明を聞いていたり、ベッドの横のソファで寝ているのを見ました。先生いわく、夜中は付き添いの家族が身の回りを世話するので、看護師は夜中に呼ばれることが少ないそうです。看護師数が日本に比べて少ないとも言われましたが、そこは少ないマンパワーでもまわせるとポジティブに考えたいところです。病棟実習では、一般的な病院内外での感染症から、多剤耐性菌（アシネトバクター・大腸菌）治療、事故による切創に難治性のマイコバクテリウム感染を伴った症例、肝膿瘍を伴う侵襲性クレブシエラ感染症など幅広く経験することができました。

講義や抄読会は毎週行われ、スライドには台湾国語、ディスカッションには英語が用いられていました。一部台湾国語でなされる場合がありますが、その場合でも英語での説明をお願いすると、その都度説明をしていただけました。医療文書はすべて英語で記載されていますので、すぐに読むことができます。患者さんと主治医の会話は台湾国語あるいはたまに台湾語（現地学生にとっても難解）が用いられていました。全般的に、医学英語をしっかりと学習した上で臨めば、実習をする上で大きな障害はありません。病院実習および日常生活で、台湾国語で簡単なやりとりと数字ができれば最低限のコミュニケーションとしては十分だと思います。ネイティブ同士の会話の中で幾つかの単語を拾うことができれば、理解を助けるかもしれません。

・実習外の過ごし方

実習時間外は主に他国からの留学生と現地医学部生との交流を楽しんでいました。平日 4~5 時に作業が終わりますので、平日夕方はよく台北市内の市場に行き、週末には近郊の街や観光名所へ日帰り・一泊旅行へ行きました。バックグラウンドが異なる多くの学生が海外実習に参加していましたので、医療制度の違いや社会情勢などについて、各国での生の声を聞いたことは貴重な経験になりました。国籍は日本（慶応大学）、米国（Rochester など）、ドイツ、オーストラリアなどでした。実習後半には大学の先生にも象山や有名な飲食店へ何度か誘っていただきました。

実習最終日には台北で行われていた感染症の国際学会にも参加させていただきました。最新の研究や調査結果について多く紹介されており、海外の学会に参加しているという高揚感も手伝って、学問に対するモチベーションがかなり上がったのを覚えています。

実習終了後は1週間で台湾周遊をしました。西部各都市（鶯楽・台中・台南・高雄）をまわって、高雄から帰国しました。

・さいごに

台大醫院ではこれらのように、日本と台湾の共通点・相違点を肌で感じながら多くの経験をすることができました。スタッフは教育熱心であり、あらゆる教育の場を提供できるよう努力していただきます。忘れられない経験はたくさんありますが、何よりも、1ヶ月の実習を通して寮や現地医学部の多くの友人に恵まれ世界中の医学を志す仲間が持てたことが、エレクティブクラブシップで得た一番大きな財産のように感じられました。



(実習終了時に病棟スタッフと)